

積雪寒冷地における低密度地域集落の QOL 計測のための意識構造分析

北見工業大学 学生会員 ○柿崎 かぶと
北見工業大学 正 会 員 高橋 清

1. はじめに

2014 年地方創生議会の増田レポートによると、全国約 1800 の自治体のうち約半数の 896 が 2040 年までに消滅する可能性があるとして予測されている。特に北海道オホーツク地域において、人口は 2010 年から 2040 年の間に 32.3%減少し、高齢化率は 43.6%まで上昇すると予測される。またオホーツク地域の高齢化率は日本全体と比較すると 20 年早く進行すると言われており、日本の 20 年後の生活の姿であると考えられる。さらに積雪等により生活の質(QOL: Quality of Life)が大きく低下しているとも考えられる。よって生活の質を客観的に表現する指標をもって、地域の将来を考えることは極めて重要である。

そこで本研究では対象地域を積雪寒冷地の集落単位とし、住民の生活満足度を踏まえた QOL 指標を構築するため、住民の意識構造を明らかにするとともに、積雪寒冷による生活の質の変化を把握することを目的とする。

2. 調査対象地域

調査対象地域は北海道北見市留辺蘂町の①東町、②旭三区、③宮下町とした。留辺蘂町は 2006 年に北見市と合併し、北見市の市街地からは直線距離で約 25km 離れている。人口は約 6400 人、人口密度 12.4 人/km²、高齢化率 46%である。また過疎法で過疎地域とみなされている地域であり、豪雪地帯としても指定されている地域である。対象とした 3 集落の位置を図-1 に示す。東町と宮下町は留辺蘂の中心地(商店街や郵便局、スーパーなどのある地域)の近くに位置し、旭三区は中心地から約 1.5km 離れた場所に位置している。



図-1 調査対象地域
(Yahoo! 地図より作成)

3. ヒヤリング調査

ヒヤリング調査では生活実態全般について留辺蘂総合支所の 2 名に調査を行い、さらに細かな生活の様子を把握するために各集落の自治会長、副自治会長の 4 名に調査を行った。明らかになった集落の特徴は「持ち家率(76.6%)が高い」、「自治会への参加率(88.4%)が高い」ことがあげられる。さらに、旭三区では週 1 回の頻度で集会有ることや、仕事や家族以外に一週間で連絡する回数が平均で 2.6 回であることから「情報交換機会が多い」こともあげられる。以上よりこれら 3 点がヒヤリング調査から得た集落の特徴と考えられる。全体として住民は集落内のつながりを意識した生活をしており、住民の QOL を計測する場合「安心」という指標を考慮し、どの程度協力し助け合って生活しているかについて計測することが必要であると考えられる。

4. アンケート調査

(1) アンケート調査概要

ヒヤリング調査をもとに立地条件の違う東町と旭三区で、集落の生活についてのアンケート調査を実施した。アンケート調査概要を表-1 に示す。

表-1 アンケート調査概要

調査内容	集落特性、個人属性、季節別生活満足度
調査時期	2017 年 1 月 25 日から 2 月 10 日
調査対象	東町、旭三区の全世帯、各世帯 2 名
調査方法	東町 自治会長が直接配布、直接回収 旭三区 自治会長が直接配布、郵送回収
回収率	東町 96%(66 票) 旭三区 45%(63 票)

(2) 集落別生活満足度

生活満足度は各項目を不満から満足まで 5 段階で評価してもらい、それを 1 から 5 の値で点数化し、それぞれの項目毎に平均値を算出した。夏季の生活満足度を比較したグラフを図-2 に示す。横軸は生活満足度の項目、縦軸は生活満足度の平均値を示している。すべての生活満足度において中心地に近い東町のほうが高い。特に大きな差が出たのは「公共交通の使いやすさ」、「買物の便利さ」、「郵便局、銀行の使いやすさ」、「病院、診

キーワード 積雪寒冷地 過疎地域 高齢化 QOL 生活の質 安心

連絡先 〒090-8507 北海道北見市公園町 165 北見工業大学 社会環境工学専攻 TEL 0157-26-9526

療所の使いやすさ」であり、生活利便施設(生活に必要な施設)までの距離に影響されると考えられる。

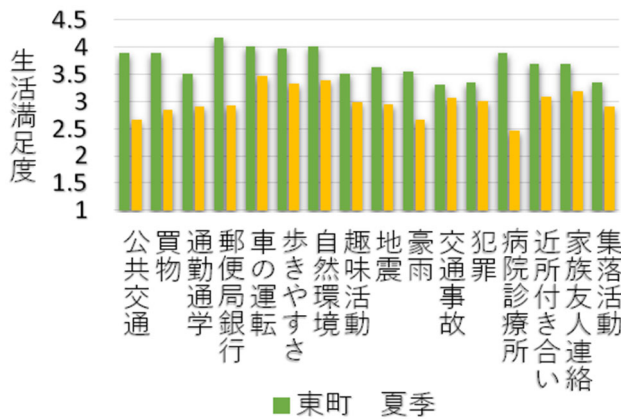


図 - 2 集落別生活満足度

(3) 季節別生活満足度

夏季と冬季の生活満足度を図 - 3 に示す。「車の運転」, 「歩きやすさ」, 「自然環境」, 「趣味活動」の快適性を表す満足度が大きく減少しているが, 「病院, 診療所の身近さ」, 「近所付き合い」, 「家族友人への連絡頻度」, 「集落活動」の安心を表す満足度は, 他の項目と比べ減少していない。季節に大きく左右されず集落の回数や連絡回数が多いため住民同士のつながりが維持され安心を得ていると考える。

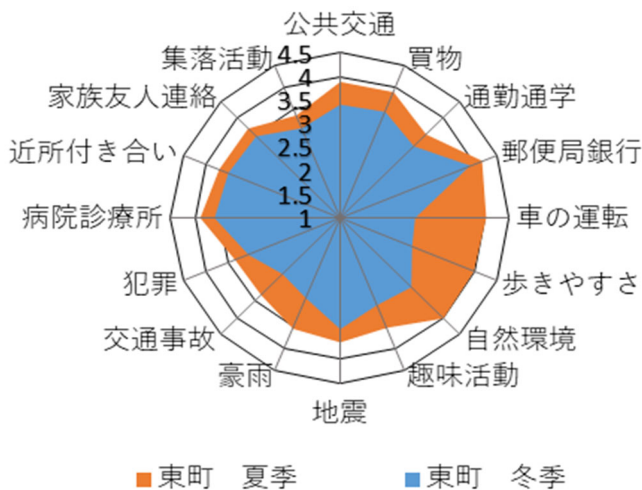


図 - 3 夏季と冬季の生活満足度

5. 共分散構造を用いた QOL 構造分析

回収した 129 票のうち, 外れ値を含む票を除いた 115 票を用いて共分散構造分析を行い, 集落 QOL の意識構造を把握した。主観的評価値は「利便性」, 「快適性」, 「安全」, 「安心」の 4 つの基本概念の潜在変数の指標であり, 潜在変数は集落特性や個人属性などの客観的指標から構成されると仮定する。利便性, 快適性, 安全の 3 要素は既存研究で用いられている¹⁾。ヒヤリング調査やアンケートの結果により「安心」という項目を追加し,

集落の生活に近い指標を用いたモデル構造を図 - 3 に示す。

分析の結果, スーパーまでの距離のパス係数がほかの項目に比べ大きな負の影響があることが示された。また連絡回数や居住年数のパス係数が「安心」に正の値を取っていることから連絡回数が多いほど, 居住年数が長いほど住民同士のつながりが深くなると考えられ, 「安心」を得ていると考えられる。よってヒヤリング調査やアンケート調査で得られた結果を反映することができた。

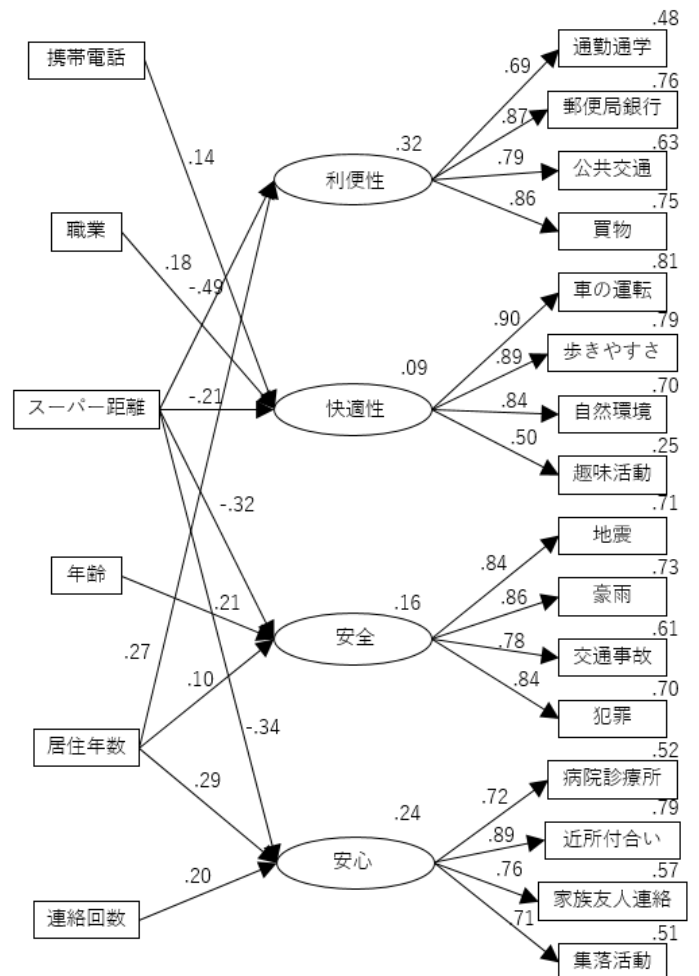


図 - 4 集落 QOL のモデル構造

6. おわりに

ヒヤリング調査結果とアンケート調査結果により得られた集住民同士のつながりを, 「安心」の指標としてモデルに追加し, 構造モデルを示すことができた。今後構造を確立させるために集落の特性が異なる場所での調査を行い, 特性の違いが客観的に示されることを確認する必要がある。

参考文献

- 1) 吉田 朗：近隣環境における「生活の質」の計測, 東北芸術工科大学紀要, No.6, 1999